# 【09】　September

玲（れい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【０９】　Ｓｅｐｔｅｍｂｅｒ

【Ｎコード】

Ｎ７２０４Ｚ

【作者名】

玲（れい）

【あらすじ】

如月亜紀（きさらぎ・あき）１６歳。

絵が上手な女の子の話。

※　文学かどうか心配です。指摘あればお願いします。

## Ａｃｔ．１　亜紀（前書き）

文学かどうか心配です。
指摘あればお願いします。

# Act．1　亜紀

Act．01　亜紀

筆を持った。
なんだか今日は調子がいい。
何を描こう。そうだ、紫使いたい。
じゃあ茄かな。うん、食欲の秋っていうし。
テーマを決めたところで食堂へと向かった。
「すいませーん、茄子ありませんか？」
声をかけると、ひょいとおばさんが顔を出した。
「あれぇ、亜紀ちゃんじゃないの」
げ、千恵子（ちえこ）さんじゃん。ひくり、と頬が動いた。
下村（しもむら）　千恵子　（４９）　嫌味なおばさん。１番の古株。
小さいときから食堂のおばちゃんたちとは馴染みだが、このおばはんとは何故か合わない。
「こんにちは。あの、スケッチしたいので茄子、貸していただけませんか？」
「あらー、未だにお絵かき大好きなのねぇ。まぁ、亜紀ちゃんのお父さんは有名な画家さんだものねぇ」
スケッチをお絵かき、と称される事が癪に障る。
「茄子は…ちょっと、恵千子さん！」
「はい？」
呼ばれた恵千子が、いそいそと出てくる。なんだか、ものすごく申し訳ない気持ちになった。

「あのねぇ、茄子あるかしら？亜紀ちゃんがお絵かきに使いたいって」

「お絵かきじゃなくてデッサンです、模写っていうか・・」
耐え切れなくなったので口を挟む。
「茄子？あるわよ、あのね、ちょうどここに・・」
恵千子が快い返事とともに茄子をよこす。
すみません、ありがとうございます、と言葉を添え、亜紀は食堂を後にした。

「ふーっ」
部屋へと戻った。ここはやっぱり落ち着くと思う。
机の上に茄子を置いた。艶があって大きい茄子だ。
この茄子と同じくらい千恵子さんの神経は図太いんだろうな。
そんなことを思いつつ、亜紀は筆に水をつけた。
大して年も離れていないのに恵千子を顎で使っているのが良い例だ。
人前では愛想よく、ニコニコと振舞っているが、うすっぺらい皮を剥がせば本性など丸分かりである。
化け猫千恵子。
思いついた名前を口に出してみて、吹き出しそうになった。
化け猫なんてレベルじゃないや。妖怪ね。
「ふふ…っ」
つい、一人笑いがこぼれてしまい、すぐさま恥ずかしくなった。
――あぁ、もう、早く書いちゃおうっと。
日が傾くまで、亜紀は茄子のデッサンを書き続けた。

◇

『芸術の亜紀』

小学生の時に付けられたあだ名である。ほとんどダジャレなのだが。
幼稚園の頃から絵は上手く、先生も皆もよろこんでくれた。
小学校に上がっても、毎回といっていいほど作品会だの出展会だの

に出された。
先生はもちろんのこと褒めてくれ、母も喜んでいた。
ただ、必ずといっていいほど、秀でるものは妬まれる。
高学年にもなると、女子のほうは煙たい顔をする者も出始めた。
「亜紀ちゃんってさ、実は自尊心強いほうだったりする？」
同じ生活班の、桃華から言われた言葉である。
なにかと事あるごとにつっかかってきて、亜紀は、この女が嫌いだった。
「は？」
「だってさ、隆史君も光君も秀明君も、亜紀ちゃん亜紀ちゃん、って」
つまり、自分が書いた絵を、男子が褒めるのが気に食わないらしい。
自尊心、といわれてもピンとこなかった。どういう意味か問おうとして――やめた。
この顔は分かっていない顔だ。まぁ、とりあえず否定しとくか。
「…別にそういうつもりはないけど」
そっけなく返したが、逆にそれが癇に障ったらしい。
「はあ！？いや、絶対高いでしょ！桃華には分かってるんだから！かまとぶらないでよ！」
最初から決め付けているくせに、あえて相手に聞く意味があるのだろうか、この女は。

こういうのって、あれだよなー、
…ほら、自問自答ってヤツ。
「知らない。あたしはただ絵が好きなだけ。絵を描きたいだけ」
「なにそれ意味わかんない！結局はちやほやされて調子乗ってるんでしょ！」
なんでそう思うのかが分からない。なんなんだコイツ。そう認識するのに数秒。

「隆史君はあげないからね！！」
捨て台詞を吐いて出て行った女を見て、亜紀はためいきをついた。

「なんなの」
結局要約すると、
・桃華は隆史のことが好き
・隆史が亜紀の絵を褒めたのが気に食わない
ということで、まぁ、一言で言うならば嫉妬だ。
中学では別々になったのが幸いである。彼女が好きな隆史君とやらも、違う学校へ行った。
亜紀が進学したのは田舎の、全校生徒１２０人という小さな中学校だ。

小学校では1学年6クラスもあったため、中学では落ち着きたい、というのが1番の理由だったが残念なことに、この学校には美術部がない。
ずいぶん前に廃部してしまったそうで、結局、無部になった。

部活は入らなかったが、クラスには存外、簡単に馴染むことができ、友達が出来たことにホッとした。
ただ、やはり帰りは1人だ。
家に帰っても暇で、勉強はやる気が起きない。
そんな亜紀を見かねた母が教えてくれたのが、家から3キロほど離れた小さなアトリエだった。

父も小さいときから使っていたそうで、近くには食堂がある。
休みとなるとアトリエに寝袋をもって籠もり、食事は食堂で済ませ

ていたらしい。
風呂もあったため、それで凌ぐ。友人に話したらありえない！と言われたが、
今どきの高校生のあるべき姿なんぞ知るか。

水道代やら何やらは家で払っていたため問題もない。
秋休みに入って４日目。アトリエに籠もって２日目。
近々開催される杠葉美術展に応募する作品を、亜紀は描き続けていた。

描きたい、と思ってはいるが、具体的に何を描きたいというのがでてこない。
食べもの？抽象画？風景画？人物画？
ううん、違う、なんだろう。
なんかしっくりこないんだよねぇ…

とりあえず、秋のイメージで描こうと思い、茄子を借りたわけだが…。
デッサンだけでは意味がないだろう。
なにか。なにかないと…！
ただ上手ければ評価されるのではない。
心に届くものが、必要だった。

## Ａｃｔ．１　亜紀（後書き）

誤字／脱字あれば指摘お願いします。
…私は絵心もちあわせていません（，・ω・、）
だから、絵が描ける人が羨ましいです↑

## Ａｃｔ．２　嵯峨　日向

Ａｃｔ．０２　嵯峨　日向

「…だめだ、これもイマイチ」
茄子を借りてきて、５日。
毎日、タイトル／ジャンルを変えてはデッサンをしたが、なんだかうまくいかず、やる気も出ない。
モチベーション上げないとダメなのかなぁ。

元来、亜紀は飽き性でもせっかちでもない。けれどもこの古いアトリエにこもりっぱなしで、なかなか満足のいかない作品ばかりが目につき、集中力が乱れつつあった。
筆握るのも、なんかイヤになってきたし。
――――仕方ない。
「…ひなのとこ、行くか」
片づけをしてバック片手にアトリエを出た。
電車に揺られながら３駅。
にぎやかな街がある西方面ではなく、森が生い茂る東へ。
いかにも古びた扉をノックすると、「…誰」と無愛想な声がした。

「あたし。亜紀だよ。ひな、いいかな？」
「…入れば」
がちゃりとドアノブを回した。木の新鮮なにおいと、色鮮やかな照明。さすがお金持ちの家。と舌を巻く。
中心で大きなパレットに色を塗っている日向がいた。くるり、と後ろを向く。

「…なに」
「あのね。美術展に描く絵がうまくいかなくて」
「そう。ていうか連絡してよ」
「あ、ごめんね、つまっててさ。…で、作品。
できれば、ひなの絵を見たいんだけど。いいよね？」
「アタシの絵？」
「うん」
しばし沈黙が続いた。
嵯峨日向（ひなた）
高校に入って隣の席だったことから、しつこく話しかけて友達になった。

有力グループ嵯峨氏の娘。兄が1人。
綺麗だが、無口なのと雰囲気が冷たい、とやや男子からは不人気。
まぁ、ひながそんなの気にするわけないもんね。

「…なに」
「え？」
「笑ってたから。おもしろい？」
「え、あ、いや別に、なんでもない」
「思い出し笑いとか、珍しいね」
やや怪訝そうだったが話をすり替えた。
「これ、紅葉のイメージ？」
赤や茶色、黄色など色とりどりの落ち葉が。風が。
さまざまな色を交えて描かれている。
きれい、なんてもんじゃない。壮大っていうか、豪華っていうか。

「これ、出すの？」
あと2か月はあるのだが完成度は十分だろう。

「ううん、それはださない。失敗したから」
「そう、なんだ」
すごい、って言わなくてよかった。と亜紀は思う。
「で？」
「え？」
「こないの？見るんじゃなかったっけ？」
「いいの！？」
「最初っから決めてかかってた人にそんなこと言われてもねぇ」
日向の軽い皮肉を聞き流して近づいた。

「言っておくけど、」
「邪魔しませんお茶もいりません口も出しません！」
「ん」
近くにあった椅子を適当にひっぱり、座る。頬が緩んでいた。
昔から、ひなは絵がうまかった。見る人に何かを伝えるというか、ココロにくるものがあるのだ。
小学校の頃だって、よくお便りに載っていた。ライバル心とかはなかった。むしろ、尊敬していた。
———ホント、天才ってやつなのかなぁ
亜紀はパレットを見続けた。

◇

「いいの？」
「え？なにが？」
「電車で、きたんだよね？」
「うん」
「時間」
バッと時計を見た。

６時３０分。こういうとき、電車が少ない田舎にイライラする。
「ごめん、そうだね。帰るよ」
「うん、またね」
お邪魔しましたーと扉を閉めてダッシュしたが。
「…うっそ」
改札でプーと鳴く電車を見送った。

コンコン。
「はい？」
日向がくるりと後ろを向く。
キィィィと扉がしなった。

「あの」
ひょこりと顔をのぞかせたのは馴染みの親友である。
時計をちらりと見ると、７：００を過ぎたかどうかというくらいだった。

「遅れたの？」
「いや、あのなんていうか」
「乗り遅れたんでしょう？」
「…はい」
「いいよ、泊まっても」
「ホントに！？」
「ただし、明日の朝食作るのは手伝ってね」
「ひな大好きっ！」
「都合のいい愛をありがとう」

結果として、日向の家に泊まることとなった亜紀であった。

## Ａｃｔ．２　嵯峨　日向（後書き）

なんだかんだで面倒を見てくれる日向さん。
ちなみに、親にはきちんと連絡しました。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7204z/

【09】　September

2011年12月23日23時50分発行